



岡山大学は
パパの育児を
応援します

岡大パパの育児エッセイ集

■発行・編集

岡山大学 ダイバーシティ推進本部
次世代育成支援室

〒700-8530 岡山市北区津島中1-1-1 岡山大学内

■発行日

平成 22 年 2 月

■印刷

友野印刷株式会社

URL

<http://www.okayama-u.ac.jp/user/jinji/diversity/jisedai/index.htm>

表紙カレンダー作成 片岡健 / 裏表紙写真 兒玉直紀親子



岡山大学



岡山大学は
パパの育児を
応援します

岡大パパの育児エッセイ集

編集・発行

岡山大学 ダイバーシティ推進本部 次世代育成支援室



はじめに

—— 岡大パパへの応援歌 ——

岡山大学には現在、「次世代育成支援室」があります。岡山大学構成員の子育て支援を進めていくところです。

育児支援策が、お母さんの支援という意味で行われてきた時期もありますが、でも実際の育児は、家族ぐるみでしているのではないのでしょうか。パパが育児に関わることは、今ではだいぶ「当たり前」になってきましたが、でもまだ、ママの子育てほど情報や理解が得られないこともあるようです。

岡山大学では、育児パパも大いに応援したいと思っています。パパもママも安心して子育てに関われる職場を作ることは、ワークライフバランスのとれた、働きやすい職場を作ることにつながるでしょう。

今回は、岡大パパ達の中から、少しじっくりと育児に関わった皆さんに、その体験談を披露してもらうことにしました。今パパである人たちは元気づけ、情報交換に役立てること、これからパパになる皆さんを励ますこと、そして周りの人たちに理解と支援をお願いすること。これがこの冊子の目指すところです。

平成 22 年 2 月 28 日
岡山大学 ダイバーシティ推進本部次世代育成支援室長
田中共子（社会文化科学研究科 教授）

もくじ



はじめに

1

1 育児パパのすすめ

育児という助走期間	今津勝紀（社会文化科学研究科 准教授）	3
育児のススメ	物部和彦（教育学系事務室 専門職員）	4
育児の記録	松島 良（資源生物科学研究所 助教）	6

2 津島パパの生き生き育児

育児も論文も	佐藤博志（教育学研究科 准教授）	8
我が家の子育て奮闘記	上廻真司（自然系研究科等会計課 主任）	9

3 鹿田パパ、ファザーリングの日々

「イクメン」「カジメン」の勧め	江草正彦（岡山大学病院特殊歯科総合診療部 准教授）	12
育児について日頃僕が考えていること	兒玉直紀（医歯薬学総合研究科 助教）	13
卵と壁	片岡 健（医歯薬学総合研究科 助教）	14

4 岡大夫婦の育児パパから

これから育児パパになる方に	本城直樹（学長室・事務改善推進グループ 専門職員）	16
負うた子に教えられ	川上英治様（岡山大学病院薬剤部 薬剤師）	18

5 育児メモリアル

海外父子家庭	田中宏二（理事（企画・総務担当））	20
僕がお迎えパパだったころ	千葉喬三（学長）	21

●おまけのページ ファミリー・カレンダーの作り方講座

23

あとがき

25

1 育児パパのすすめ

育児という助走期間



今津 勝紀

社会文化科学研究科 准教授

2003（平成15）年の夏、二人目の娘の時に育児休業を取得しました。

私も妻も岡山県には親類縁者がなく、私たちの両親は遠方、しかも妻は隣の県で会社員です。三つ離れた長女の際には、妻の育児休業明けとともに、保育所への送迎、朝夕の食事の準備といった家事が、一気に押し寄せてくることとなりました。その頃は、毎朝、妻と娘を送り出してから、職場の自分の机に座って、ようやく一息つくというような状況で、いつまでこんな生活が続くのだろうと、不安に思ったりもしましたが、それも、どうにかこうにか、何とか適応してゆきました。そんな折に、第二子（次女）を授かることとなりました。

今回は、妻の職場復帰と入れ替わりで、否応なく突きつけられる状況に対処するために、慣らしの期間を設けるのが良策と考えました。幸い、次女は、六月に生まれる予定だったので、ちょうど大学の夏休みにかかる時期です。これなら何とかできるのではと思い、育児休業を取る方向で調整をはじめました。その年に開講する授業を移動したり、さまざまな仕事については同僚の皆さんにお願いしたりして、どうにかやりくりをして、育児休業にこぎつけました。私の場合、妻の育児休業を引き継いで、そこから、ほぼ夏休み期間を育児休業にあてました。

上の娘が通う保育所では、0歳児から預かってもらえたので、

保育所を利用しながらの育児休業となりました。普段、子どもを保育所に預けていると、子どもがそこでどう過ごしているか、気になって仕方がないこともあります。幸い休業中ですので、のんびりと保育所で過ごすこともできます。保育所で、たくましく、のびのびと育ててゆく子どもたちと身近に接することができたのは、貴重な体験となりました。なお、育児休業中でも、どうしても仕事から完全に離れることはできないのですが、そうした際には保育所を併用するのが効果的でお勧めです。

育児休業を取得してみた実感ですが、親も子どもものんびりとスタートできたのではと思っています。ちょうどよい助走期間になりました。まだまだ、改善すべき点があるのは事実ですが、男性のみなさんもチャンスがあればいかがでしょう。

育児のススメ

物部 和彦

教育学系事務室 専門職員

2006年4月から半年間育児休業を取得しました。岡山大学の男性事務職としては「初」だったと聞いています。

「初」の割に特に大きな困難もなく育児休業を取得でき、スムーズに職場へ復帰することができたのは、大学という組織の大きさと当時の部署の理解の賜だと感謝しています。（本人の「育児を取る！」という喧伝と、「あいつなら仕方ない。」という周囲のあきらめの気持ちのおかげとの説もあります）

第3子を対象のしかも1歳を過ぎてからの育児休業であり、もともと共働きのため第1子の時から育児には参加していましたし、家事についても特段の苦手意識もなかったのであまり抵抗感なく

主夫生活に入りました。

実際に育児休業を取ってみて感じたことは、「何事にも向き不向きはある、当然家事・育児にも。」という当たり前の感想でした。期間限定だからこそ頑張れたこと、やはり女親の方が向いているのではと思ったことは多々あります。

ですから、声を大にして「育休はいいですよ、是非取得しましょう!」とは言いません。今や共働きの家庭が多く、家事や育児に男親が参加しているのは当たり前、育児休業を取らなくても日々家事・育児に参加している方は多数いるのですから。

とはいえ、あなたが主夫生活に関心があり状況が許すのなら、是非育児休業を利用してください。これほど子どもと長く密に接する機会はそうそう得られません。

これから育児休業を取る方には、可能であれば1年間の取得をお勧めします。半年はあつというまでした。主夫生活に慣れ余裕を持って子どもに接することができる頃には終わりが見える状況だったので、もう半年あれば上記の感想ももう少し違ったものになっていたかもしれません。

また、育児休業の取得は第2子以降、1歳以降での育休をお勧めします。子どものためにも母親のためにも1歳までは母親からの授乳が良いと思います。一人育てていることの経験は大きいので、育児ノイローゼも心配なし・・・かな。それに第2子以降と言うことであれば少子化対策にもなります。

そうそう、メタボ対策にも育休はお勧めです。何しろ半年間で8kgは痩せましたから。

最後に、育児休業を取ったことで子どもに何か影響を与えられたのかが気になったので、育休取得時に小学2年生だった第1子にその当時の感想を聞いてみました。ところが、なんとまった

く覚えていないとのこと。下の二人は当然覚えてないでしょうから、子どもは誰も覚えていないことになります。結局、育休取得は親の自己満足でしかなかったのでしょうか。ただ、何かして欲しいことがあるとき、母親ではなく必ず私が指名されるのは立場が弱いからなのか、それとも三つ子の魂何とやらということなのか・・・。

育児の記録

松島 良

資源生物科学研究所 助教

小生よりも格段に育児と仕事のバランスをうまくとっている男性職員が身近に多い。小生の経験が他人の役に立つとは思えないが、将来子どもに読んでもらうのも良いかなと思い、自分の経験を記録に残すことにした。

小生の妻は京都で仕事をしており、岡山大学に赴任した5年前から別居が始まった。その一年後に妻が妊娠し、出産後は妻が育休で一年間仕事を休んでくれた。妻にとって今の仕事は天職と言えるような仕事で、一年間離職するのは大変だったと思う。この間、同居した妻は育児と家事全般をしてくれて、家に帰ればご飯ができていた。主婦がいるとこんなにも楽なのだなど感動した。しかしいつの間にか、皿洗い、洗濯、掃除機、子どもの寝かしつけが小生の担当になっていた。週末には妻の自由時間を設け、その間小生が子どもと一対一になった。母乳を保存しておけば特に大変ではなかった。

当初は、妻の育児休暇が終われば、妻と子どもは京都で暮らし、小生が週末京都に帰るという生活をする予定だった。妻の育休明けが近づくにつれ、妻や子どもと離ればなれになるのがつらく



なった。誰にも相談せずに小生も倉敷の住居を引き払い、京都から倉敷に通勤する事を決めた。妻は反対だった。妻の育休明け後1ヶ月間、小生は育児休暇を取った。小生の育児休暇が明けると京都から倉敷までの新幹線定期券を購入した。給料の半分以上の金額だった。落とさないように、四六時中首から下げている。しかし、毎日通っている仕事が進まない。そこで、火、木、金(週末)に京都へ帰ることにし、その他の日は研究室に泊まり込むことにした。段ボールの上で深夜に仮眠を数時間取った。ある時、研究室の教授が研究室にソファを買ってきた。夜に使うのは小生一人であり、やさしさが心に染みわたった。

職場を17時に出発すると京都の自宅に20時に到着する。ただ帰るだけでは妻の負担が増えるだけなので、帰宅直後に子どもを風呂にいれ、洗濯と皿洗いをした。寝るのは22時くらいだった。翌朝は5時に起きて通勤した。疲れている時には電車の中でよく寝たが、デスクワークもよくした。小生が帰宅した時に子どもが叫び声を上げて抱きついてくることはうれしい。疲れを忘れた。

このような生活が一年半つづいた後、小生の気持ちと家族の生活リズムも落ち着いたので当初の予定通りの単身赴任生活にした。今は、週末だけ子どもと過ごしている。土曜日に妻は社会人向けの大学の講義に通い出したので、小生が子どもと二人きりになる。育児と家事をこなすわけだが、子どもももうすぐ4歳くらいになると結構戦力になる。子どもが家事を遊びみたいと感じてくれて一緒に料理や洗濯、掃除などを行っている。子どもには親の勝手を押しつけているという罪悪感を常に感じている。

また、職場の方々にも多大な迷惑をかけていることも自覚している。この場を借りて心からの謝罪と感謝をしたい。

2 津島パパの生き生き育児



育児も論文も

佐藤 博志

教育学研究科 准教授

現在4歳の長男がおり、幼稚園に通っています。私と妻は東京出身であるため、二人で育児をしています。育児を通して、子どもの行動の本当の意味を考える必要性に気がつきました。3歳頃の子どもはいたずらが好きです。普段はよいのですが、いたずらも度を超すと、こちらが怒りたくなります。しかし、「怒っても逆効果ではないか」とある時ふと思いました。そして、怒る代わりに「今、いたずらしたのは、さみしかったから?」と聞いてみました。すると、「うん」と答えました。「じゃあ、いたずらやめて、一緒に絵を描く?」と聞くと、笑顔で「うん」と言いました。このように、子どもの行動の本当の意味を考えることの大切さを学びました。

私たちの子供は、3歳の時(2009年度)から、幼稚園に通っています。4歳から幼稚園に通わせるケースが多いですが、私たちは3歳から幼稚園に通わせて良かったと思っています。幼稚園に入ってから、あいさつができるようになりました。また、友達もできて、少しずつ分別がついてきたと思います。幼稚園は子どもにとって初めての社会です。社会に入らなければ、マナーを習うこともできません。その意味で、私たちの家庭の場合、3歳

から幼稚園に通わせたことは良かったと思っています。ここで、「私たちの家庭の場合」と述べた理由は、家庭によって状況も異なるし、子どもによって性格が様々だからです。子育てに「絶対こうしなければならない」ということはないと思います。子どもの様子、保護者の生活・職場環境に応じて、柔軟に子育てをしていくことが大切だと思います。

私ごとですが、2008年10月に学位を取得しました。博士論文執筆の最終段階(2006年)、予備審査(2007年)、リライト、最終審査(2008年)のプロセスは、丁度、子どもが今よりも小さかった時期です。「赤ちゃんがいたのに、すごいね」と言われることがあります、妻が助けてくれたのだと思います。そして、子どもからエネルギーをもらったのだと思います。大学で論文を書いて授業もこなし、帰りに買い物をして、帰宅して妻に「今日は赤ちゃんどうだった?」と聞き、その繰り返しでした。部屋で寝転がって論文を読んでいると、子どもが論文を取り上げて、読む真似をしていました。私の真似をするのが楽しかったのか、笑顔で論文を眺めていました。育児と博士論文、なぜあんなに全力で毎日過ごすことができたのか。今となっては不思議な感じもしますが、研究と子育てが一緒になった良い思い出です。

我が家の子育て奮闘記

上廻 真司

自然系研究科等事務部会計課 主任

私の朝は、息子との自転車通勤から始まります。宿舎から大学津島キャンパス構内を抜け保育所へ子供を預ける出勤方法を約6年間続けています。6年の間には、妻の育児休暇で子供を保

育所へ預ける必要がなくなったり、息子と娘の2人を保育所へ預けたりしていましたが、今は息子1人を自転車の後部座席に座らせ会話をしながら通勤しています。

我が家は、夫婦共働きで祖父母も県外や県北と遠方であるため、保育園への送り迎えは、夫婦で行っています。幸いにも双方の勤務時間が異なっているため「送り」は私が、「迎え」は妻が、と調整し私の超過勤務時にも何とかやっています。

妻は、日中の休みがなかなか取れないため、保育園の行事は、主に私が有給休暇を取得して参加しています。これまで「給食参観」「親子遠足」「生活発表会」等と参加し、お母さん方の多いなか、子供と一緒に楽しみ、子供の成長と頑張っている姿を見守っています。近頃は、息子の友達やお母さん方とも仲良くなり、その子の頑張っている姿を見ると自分の子供のように思え涙がでそうになります。

また、子供が病気の場合も、主に私が有給休暇や特別休暇(男性職員の育児、子の看護)を時間単位で取得しています。休暇簿が複数枚になった事もあり、その時はさすがに育児と仕事の両立の大変さを痛感しましたが、この大変だったことが振り返れば一番の思い出ですし、子供と一緒に居られた幸せな時間だったと思っています。

毎朝の出勤に話を戻しますと、子供と一緒に出勤すると言うことは、時間との戦いです。ただ、これは私の「時間」との戦いで、子供には全く関係ないことなのですが、時間に余裕が無くなると子供を怒ったり、自分がいらついたり、後で子供の消えた顔を見ると「しまった!!」と反省しています。

子供を怒ったり、自分がいらついたりしても、子供は早く動いてくれません。反対に、「少し遅れてもいいや」と聞き直り余裕



があると、子供は案外早く動いてくれます。子供も親の姿を見て何か感じているのだと思います。

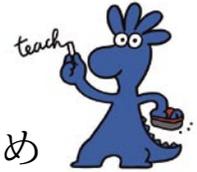
皆さんも、もし「怒ったり」「いらついたり」したら、ちょっと一息ついて下さい。皆さんにとって、その時間は確かに大事ですが、子供にとっても、その時間は皆さんが思っているよりも、もっと大事なように思います。「怒られたり」「いらつかれたり」したことを、子供はしっかり見て、記憶していると思います。

今春からは、娘との自転車通勤が始まります。今後も「余裕」を持って子育てに頑張っていきたいと思っています。職場の皆さん！どうぞよろしくお祈りします。

これからも、私の育児は続くのであります！！



3 鹿田パパ、ファザーリングの日々



「イクメン」「カジメン」の勧め

江草 正彦

岡山大学病院特殊歯科総合治療部 准教授

育児に家事に積極的な男性のことを育メン・家事メンと最近呼ぶらしい。夫の家事・育児時間で日本は欧米諸国に大きく水をあけられている。6歳未満の子がいる夫が1日にこなす家事時間は、日本では約1時間のうち育児の時間は33分。一方、出生率が上昇しているフランスではそれぞれ2時間30分と40分、米国でも3時間と1時間である。私が研修で滞在していた米国のシアトルおよびノースカロライナの職場でも夕方6時頃には男性の先生方も帰宅していく姿をよく見かけたものだ。

そして私も帰国後から育メン・家事メンにならざる負えない状況になった。当時1歳になったばかりの息子が渡米時に発症したアトピーが悪化し何度も入院することになった。お互いの親に頼れない状況でかつ仕事をしている妻をフォローするために、病院の小さな子供用のベッドに添い寝をして何度となく夜明けを待ったものである。まさに不眠不休の看病であった。朝、夕の保育園の送り迎えや帰宅後お風呂に入れ、食器洗いをしてやっと仕事に取りかかる毎日だった。職場の同僚には大変に迷惑をかけたが、逆に同じ状況のスタッフの気持ちが良く理解できる。

子育てに手がかかる子ほど可愛いものである。私にとって小学1年の1人息子と一緒に湯船につかっているのが至福の時である。

また、育メン・家事メンになってから患者さんや患者さんの親

の気持ちがよくわかるようになってきた。我々医療人にとってのやりがいや達成感として最も大きいのは、自分が患者さんの役にたっているという実感である。

Narrative Based Medicine（生活や物語に基づく医療）をおこなうようになり、患者さんに寄り添う心が持てられるようになったことが子育てによって得られた最大の収穫である。

育児について日頃僕が考えていること

兒玉 直紀

医歯薬学総合研究科 助教

今年の元旦に「男性の育休取得率は1.23%」という記事を見かけました。女性では9割以上だそうですが、男性の育児休暇取得はなかなか難しいという現状を示している結果です。しかし、これは現代社会において男性も積極的に育児参加しましょうということの裏返しとも受け取れます。

さて、うちには現在9ヶ月になる娘がいます。最近では、昔あまり興味を示さなかった育児関連の記事にも目を向けるようになりました。今回のテーマは「パパの育児」ということで、育児について日頃僕が考えていることを述べたいと思います。

まず、父親の在り方についてです。当たり前のことですが、子供にとって母親が一番大事で、かつ特別な存在です。では、「父親はどんな存在なんだろう？」と考えることがあります。現在のところ、父親は母親の代わりはできないけどもう1人の親として育児をサポートする存在だという結論に至っています。例えば、おむつを替える、ミルクを飲ませる、お風呂に入れる、本を読み聞かせる、一緒に遊ぶ、子供を寝かしつける・・・など育児で協

力できることは挙げればキリがないです。よく父親として何をしたら良いかわからないという声を耳にしますが、子供のそばにいて育児をサポートするだけで十分役に立っているのではないのでしょうか。きっと子供がもう少し大きくなれば父親は父親としての役割が出てくると思いますし。

そして、もう一つ僕が心がけていることは「子供との時間を少しでも多く作る」ことです。よく物の本などによると、「大事なのは子供と過ごす時間ではなく密度である」と書いています。ところで、子供と過ごす時間の密度なんてどのようにしてわかるのでしょうか。僕は正直わかりません。そこで、子供がいる生活になってからはできるだけ子供と過ごす時間を増やすことを重要視しています。最近うちの娘は人見知りをしていて、落ち着かないと泣きます。一緒に過ごす時間を増やすことで、娘にとって「父親＝落ち着かない存在」にはならないようにしようと思いながら毎日過ごしています。

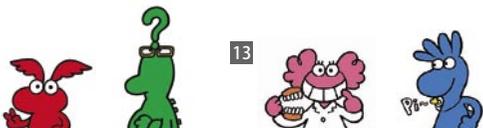
「子育て期はあっという間に終わるから今を大事に過ごして下さい」と声をかけて頂くことがあります。まさにその通りです。家族みんなで平和に暮らせる毎日に感謝しつつ、未熟な父親ではありますが子供が喜んで父親になつてくれている姿を見ながら多少父親らしく過ごせているのかなあと考える今日この頃です。

卵と壁

片岡 健

医歯薬学総合研究科 助教

作家の村上春樹さんがエルサレム賞を受賞したとき、印象に残るスピーチをしました。「高くて、固い壁があり、それにぶつかって



壊れる卵があるとしたら、私は常に卵側に立つ Between a high, solid wall and an egg that breaks against it, I will always stand on the side of the egg.」小説を書くときに、このことをいつも心がけている。もちろん村上さんは紛争の比喩として「卵と壁」の話をしたのですが、これはそのまま子育てとそれを取り巻く家庭や社会にもあてはまります。

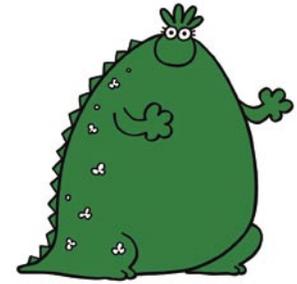
子育てや家庭生活、そして社会生活をする上で、実は「常に卵側に立つ」ことがいちばん難しいのです。子育てにおいて「卵」は子どもだったり、ママだったりします。でもほとんどの場合、パパではありません。私たちは意識して行動しないと、いつの間にか「壁側」に立っていて、たいせつな「卵」を失ってしまうかもしれません。

大学保育所や小学校の学童保育で役員をしていて、働くママたちは想像以上に大変で、つらい思いをしていることを知りました。そして子育てを支援している保育士や学童保育の指導員も「卵側」に立って、ギリギリの戦いをしています。そういう状況を理解していないパパの何気ない行動や一言が、がんばっているママの心をすり減らしてしまうのです。私の妻も（口には出ませんが）多分そうだと思います。でもパパにはそのことが、なかなかわからないものです。だからこそ、心がける必要があります。ママと子どもは、たいせつな「卵」なんだということを忘れないように。

家庭の中で、そして社会の中で、いま自分は「卵側」にいるのか、あるいは「壁側」にいるのか。自分自身が「高く、硬い壁」になっていないか。このくらいでいいだろうと思ったとき、さらにもう一步「卵側」に近づく優しさと勇気を持てたらいいなど。

こんなことを考えながらも、実際はつい子どもたちやママにぶっきらぼうなことを言ったりしてしまいます。そんな日はひとりでこっそり反省会をしています。

4 岡大夫婦の育児パパから



これから育児パパになれる方に

本城 直樹

学長室・事務改善推進グループ 専門職員

学長室事務改善推進グループに所属しております本城と申します。これから育児パパや育児支援者になれる方等に対し、何か参考となるお話ができるのかは分かりませんが、これまで経験したことなどを振り返りながら、現状についてご紹介したいと思います。

現在、私の家族は附属図書館に勤務している妻と息子2人（小学校3年生（9歳）、保育園児（4歳））の4人家族です。長男が生まれた当時は、まだ次世代育成支援という言葉もなかった頃で、妻は産前産後の休暇が済んで直ぐ（女性にとっては体の負担も大きい時期だそうですが。）生後2ヶ月の赤ちゃんを保育園に預けなければ職場復帰できない状況が当たり前でした。そうした理由から、私は必然的に妻をサポートしなければならなかったのです。

私はもともと子供と接するのが苦手な方でしたが、長男と次男の出産講習の受講と出産に立ち会い（させられ?）、なおかつ2回とも見事に徹夜の難産を経験しましたので、出産の大変さと同時に生命誕生の瞬間を目の当たりにしたことで、子育てに対する意識が若干高まったことは事実です（可能であれば立会い出産をお勧めし

ます)。

日常生活についてですが、職場以外での平日の時間が限られる慌ただしい状況の中、子供達が成長するにつれ、やることも更に増えていきます。妻は食事の支度や小学校(学童保育)や保育園の準備(お手帳の記入など)、長男の勉強相手と次男への本読み、小さい頃では授乳など、私は食事の片付けや風呂入れ、オムツ交換、寝かしつけ、私と妻の毎日のお弁当作り(主に前夜のおかず等を詰めるだけです。)など、それに加え、通常の買物(週末にまとめて買いです。)やゴミ捨て、掃除、洗濯、アイロン掛け等もありますから、妻との役割分担や協働作業が大切になると思います。

一日にやらなければならないことは決まっていますので、当たり前ですが誰かがやらなければなりません。全てを妻に押し付けたりなどすれば、パンクするのが目に見えますから、自分の仕事と割り切ることで妻の負担軽減と家庭円満が保てると思います。

長男が生まれる頃に職場の先輩から、「これから6年間は自由がなくなるね。」と言われた一言が今でも心に残っています。実際に子供が生まれてしまえば、自分や妻が病気になるうが、避けられない用事ができようが、子育てに休みなどはありません。長男が生まれて間もなく、「もうしばらくお腹に戻って!」と妻と一緒に叫んだこともありましたが、その長男もお手伝いができるまでに成長し、今ではそのことが懐かしく思い出されます。

仕事と子育ての両立は正直大変なことも多いですが、子育ては子供の成長を見守ると同時に我々夫婦にとっても、真剣に悩んだり、叱ったり、反省したり、感動を得たりすることで、色々と成長させてもらえる貴重な期間であると感じています。今後も我々夫婦に様々な出来事が待ち受けていると思いますが、この限られた期間を楽しみ・悩みながら共に成長して行きたいと思っています。



負うた子に教えられ

川上 英治

岡山大学病院薬剤部 薬剤師

毎日、仕事の悩みを抱えつつ、疲れはて相談する相手を探していると、目の前にいるのは我が息子。長男(7歳)に何気なく、こちらから「人生において、人間に必要なものはなに?」と、問うてみると。

長男曰く「ええっと、息をすること」。

父曰く「それは、無意識でしてるじゃん。そうじゃなくて、意識したり考えてすることで必要なものはなに?」

長男曰く「まっすぐ前を向いて歩くこと」。

父「(無言・・・確かに当たっている)」

長男曰く「毎日、学校に行くとき線路や横断歩道で車に気をつけてとお父さんいうでしょ」。

父としては、予期せぬ答が返ってきて、感心しつつ、天からの声とありがたく頂くばかり。

さて、仕事を滞りなく終え、次男(5歳)を保育園に迎えにいき、「えー、今日はお父さんお迎え!? お母さんはお仕事で遅いのー!? イヤだ!」。次男してみれば、週に何日かは父親お迎えであっても、やはり母親が迎えに来る方が良いらしい。しかし今日は母親も遅番で残業ということ、子供なりに理解しているらしい。その気持ちは押し量ることはできるが、それにしてもこの態度、父親としては複雑な気分である・・・。

自宅に足早に帰ると、玄関先がほんのり暖かい。「お帰りなさい」の声が家の中から聞こえる。あたりはとっぷりと暗く、冬至を迎えるある年の瀬だった。長男が学童から先に帰宅して待っていてくれ

ているのだった。

さあここから父親の本領発揮。帰宅と同時に風呂のお湯張り
夕飯の準備さらには冷え冷えになった洗濯物を外から取り入れ。も
しかして、職場よりも同時に複数の業務をすすめているかも・・・。

父「今日はカレーライスでもいいか？」

子供たち「いいよ、お皿とスプーン用意しとくね」

父「おねがい。あとお風呂のタイマーセットして」

子供たち「わかった」

さて食事事も早々に済ませ、お風呂の沸く時間を待つ間、テレビ
でもちよいとと男3人でくつろいでいると、父は日中の疲れもピーク
に達しつつウトウト・・・。次男がそっと布団を掛けてくれる。はた
と気づくと、

次男「大丈夫、寒くない」

父「ありがとう」

僕は、かつて育休を取得して脚光を浴びたブレイク元首相のよう
に国の行く末を左右する事はないが、我が子にとっては、父は我
が家を左右する大統領であり、一方、料理長でもあり、時には寝
るときまで一緒に過ごす母親代わりでもある。

子育てをすることで、最近すべてのものごとが待てるようになって
いる。薬剤師はとかく薬だけを看て、患者さんに向き合わない
傾向がある。しかし、患者さんはもしかして医療従事者を親のよう
に感じて頼るものなのではないのかと考え、僕は一度受け止めるこ
とができるようになってきたと自覚し始めている。

子育てを通じて、僕の方が教えを享受することは多い。そして同
じ目線で待ち、共に歩むことを日々学んでいるのではないだろうか。
<自己紹介 年齢：38歳(亥年) 役職：薬剤師(入局13年目)
状況：本人と妻、長男(7歳)、次男(5歳) 共働きで核家族 >

5 育児メモリアル



海外父子家庭

田中 宏二

理事 (企画・総務担当)

25年前、在外研究で米国ワシントン DC の郊外にあるメリー
ランド大学に滞在中のことである。妻と長女は高校進学のため
に途中で帰国し、残った中学生の息子と私の父子生活が始まっ
た。妻が作っておいた週5日分(他の2日は外食日)のレシピ
を基に、肉じゃが、カレーライス、親子丼、ハンバーグ、焼きめ
しの5種類を、毎週繰り返し3ヶ月余を過ごした。当初はまず
いとか、変わったものが食べたいなど文句を言っていた息子もそ
のうち諦めてしまった。地元の公立中学校に通う息子の勉強を見
ながらで、手間のかかる息子も一緒に帰ればよかったのにと内心
思っていた。

ところが、帰国が近づきアパート内の家具類や車を売り払うガ
レードールで、片付け中、私は腰痛になり動けなくなってしまっ
た。以後は家事のすべてを息子に頼り、また帰国時は一切の荷
物を息子に持たせ、何とか帰り着いたのである。そのとき息子が
少し大きく見えた。

僕がお迎えパパだったころ

千葉 喬三
学長

次世代支援室から、標題のようなことについて何か書けとのご下命を受けました。そう言われれば、確かにそんな時期もあったな、と思いを新たにしつつ画面に向かっていきます。でも、何でそんなこと知ってんネ？

岡大に赴任して間もないころ、家内が急に外の仕事に出ることになりました。県南のある企業が経営の武器としてコンピュータを導入してしまった。今と違って当時はパソコンなどというものはなく、小型ながらも本格的な IBM 電算機で、専門的なマニュアルはあるがもちろん出来合のソフトなどここにもありませんから、導入したもののろくに動かない。何とか使えるようにしろ、ということでかみさんが担ぎ出されたというわけです。

我が家には2歳になる女儿がいましたので、これを何とかしなければなりませんので、保育園を探しましたが、年度途中ということもありどこも断られ、何とか員数外(いってみればヤミ)で入れてもらえる園が見つかった時はまずはホッとしました。が、すぐに、この国では、こんな制度上の不備が当たり前になっているのか、これでは共働き等が安心してできないではないか。強い疑問と憤りを覚えました。

5時が近くなると頭の中は迎え、迎え。せかされながら、中古の自転車を飛ばして園に駆けつける毎日(送りはかみさん)が1年半ほどは続きました。あの当時の冬は、心なしか、もっと寒かったように思います。子供に防寒着を着せ、ボロ自転車であんな寒い西風と格闘しつつ帰宅したものです。母親も未だ帰っていない寒い

部屋(合同宿舎にいました)でしたが、娘は健気に一言も泣き言をいわなかったのを覚えています。晩飯はもちろん私が作ります。料理の腕は相当なものですよ??

夕方、園に迎えにいったとき、何度かこの国はどうなっているのか、というまたまた素朴な疑問と憤り(よく憤るのです!)を覚えたことがありました。お迎えは皆同じ頃になると、子供達は我先に親御さんのところへということで、いつも玄関是相当に混雑しています。そこへ、ドケドケといわんばかりにクラクションを鳴らしながら、どでかい外車を乗り付け、毛皮をお召しになったマダムが降りてきて、我が子(と思われる?)をピックアップするのです。これだけでも、なぬ!ですが、聞くと、この方は保育料はおろか、おやつ代も免除されているというのです。一方、安月給の助教授(私)は最高額を徴収されているのです。

よく知られた課税対象収入基準(収入の捕捉)、いわゆるトーゴーサンピンです。あちらはサンかピン、こちらはトー。要するに税金を殆どお払いになっていないのです。だから保育料などはむろん払う余裕がない!? この矛盾(と小職は思うのです)は実は大学でも大手を振ってまかり通ってます。授業料免除審査基準です。

私は、副学長時から、こんな授業料免除枠(金)は必要最小限度に抑えて、同じお金を「岡山大学奨学金」として使うべきだと主張してきましたが・・・。

もう、止めにしましょう。ともかくこんな題を与えて頂いたので、若い頃を思い出すことができました。それに、歳をとっても性根は少しも変わっていない(成長していない)自分を改めて認識させていただきました。お礼を申し上げます。





おまけのページ

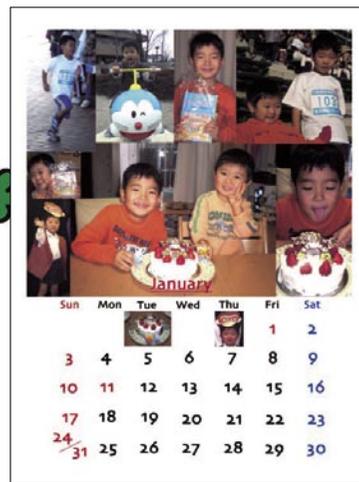
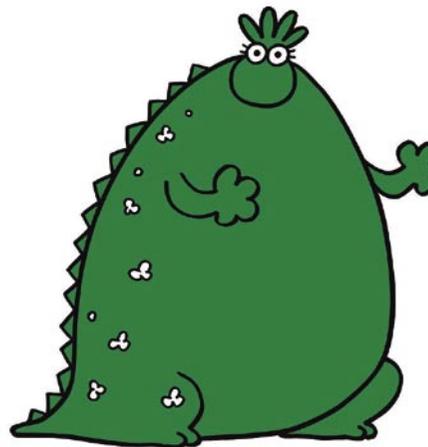
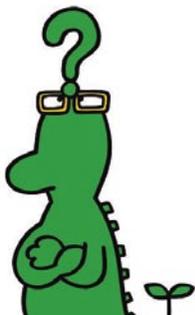
表紙カレンダー制作者・片岡パパによる

ファミリー・カレンダーの作り方講座

毎月の写真をまとめてカレンダーにすると
パパ株上昇まちがいなし

—— 手順 ——

- ★まずは家族みんなに「毎月カレンダーを作るぞ」と宣言する
(後に引けなくなります)。
- ★続いてとにかくデジカメを持ち歩いて写真を撮りまくる
(腕は関係ナシ)。
月末になったら、データを開いてベスト写真を選ぶ(10枚位)。
- ★最後にプレゼンテーション用ソフトを使って写真と日付をA4縦に
並べておしまい。
(ごちゃごちゃしてもいいし、写真が1～2枚でも大丈夫)
- ★半年も続けると家族の大切な記録になります。
おまけに写真の整理が毎月できます。



—— コツ ——

- 1 画像編集ソフトで写真の補正やトリミングするときは、JPEGかTIFFにそろえて必ず別名保存(オリジナルは残しておく)。
- 2 複数の写真を載せるときは、写真1枚を2～3MB以内にサイズダウンすること。1～2枚なら5～6MBあってもよい。
- 3 始めのうちは、デザインは凝らない。真ん中に一番の写真を置いてから、周囲の写真を適当に配置しましょう。
- 4 使わなかった写真は特に整理せず、毎月のフォルダに保存するだけ。長続きのコツは、無理はしないこと。
- 5 こまめにバックアップしましょう!



あしがき

最近の岡山大学の次世代育成支援策は、だいぶ充実してきました。学内には長期休暇中の学童保育や病児保育が立ち上がり、保育園の充実がはかられ、産休や育休時の非常勤雇用が整備され、育休からの復帰支援体制も整ってきました。家族が職場参観に来る、家族の日などのイベントも催されています。夕方会議の自粛という方針も、通達されました。育休が推奨され、男性の育休取得実績もあります。

この冊子では、パパ育児の身近な具体例、実感を伝えてみようと考えました。職場に育児支援の文化ができるまでには、こうした広報活動も大事だと思います。

制度を作り、うまく活用し、実際に働きやすい職場を作り上げていくことが課題です。子育て支援が社会的課題となっている現在、策をきちんと備えた組織として社会に認知されるよう、努力していきたいと思います。パパ達とともに、歩んでいきましょう。

岡山大学 ダイバーシティ推進本部
次世代育成支援室

次世代育成支援室員 (平成22年2月)

田中 共子 (社会文化科学研究科 教授)	三浦 清美 (岡山大学病院看護部 看護師長)
笹倉 万里子 (自然科学研究科 助教)	早川 みどり (総務・企画部人事課 主査)
十川 千春 (医歯薬総合研究科 助教)	今津 勝紀 (社会文化科学研究科 准教授)
上廻 真司 (自然科学研究科等会計課 主任)	佐藤 博志 (教育学研究科 准教授)
小山 登喜子 (岡山大学病院総務課 係長)	